

ぬくもりを感じて

■ いじめによる友の不登校の果てに

いじめが原因で不登校になった幼馴染みを毎朝ずっと迎えに行った。その友だちの父が我が子のいじめを苦しんで鬱状態になってついに自殺してしまった。自分がいじめを受けて辛かったときよりもっと腹が立ち、絶対にこんな人の痛みが分からず平気でいじめをするような人間にはならないと決意した。

■ 仲間と繋がれた人権集会

高校時代、帰る途中で民家の火事を発見し、消し止めたお礼に消火器が贈られて以来、「消火マン」のあだ名が付けられる。やがて生徒会長に推され、学校生活を活発に過ごす。しかし多くの生徒にとって同和問題を考えることは苦手。全校集会を開き、自分が被差別部落の出身であることを表明する。小・中学校でのいじめの話を直接聴いてもらい、意識を変えることができればと思った。ところがその場で、ある子が叫ぶ。「僕はピーマンが嫌いです。でも、これからは食べてみようと思います。」この一言で会場は爆笑の渦に。彼にとってピーマンは宿敵。食わず嫌い。みんなが駆けつけてくれ、「部落出身だというお前の話を聞いて目が覚めた。これをきっかけに自分も学習したい」と励まされる。この時、生まれて初めて人間の温かさを感じるようになった。

■ 大学時代

四国学院大学に特別推薦で入学し、人権学習のリーダーとなるべく活動を開始。在学中に、米子市出身の女子に悪質な「寮から出て行け」という差別文書が送られ、大学全体で取り組むことに。同じ被差別部落の出身でも、強い子もいれば、弱い子もいる。手首を切って自殺を図る者もいた。

■ いま、ここにある結婚差別

結婚を約束した相手は近くの町に住む宏美さんだが、彼女の両親や兄弟は彼が部落の出身であることを理由に反対。彼女を大事に育ててくれた両親に、自分を知って欲しいという思いは強く、宏美さんも彼の素晴らしい人柄に理解を得ようとするが、根強く残る偏見から会おうともしない。二人の悩みは深く重い。全国から二百人の仲間が駆けつけ、宏美さんを励ます。彼女は勇気づけられ、終に彼との結婚を決意する。そして2006年7月、二人は婚姻届を提出。幸せになるという喜びの中にも固い決意が伝わってくる。彼女の両親には「結婚しました28年間育ててくれてありがとう」の手紙だけを送る。翌年5月、長男が誕生し、故郷の温もりを受けて欲しいとの願いを込めて「里温」と名づける。中倉さんは実家へ孫の顔を見せようと提案し、長い間音信不通にしていた宏美さんの実家を三人で思い切って訪問する。かわいい孫の顔を見ると、家族のわだかまりも消えていき、彼女の母は焼き肉を用意し、祖母も宏美さんの話しをしてくれ、帰りは温かく三人を見送ってくれる。以後毎週土日に連れ帰り、翌年正月、ようやく彼女の父も会ってくれた。

差別する相手を変えようとしても難しいが、孫を抱くという人間として当たり前なのがきっかけで分かり合える日が来ることもある。しかし、こんなケースはいい方で、わだかまりの解けない家族もあると聞く。次男「響希」も生まれ、幸せを更に大きくした宏美さんも、今では人権集会に出席し、自分の体験を語りに来てくれたりしている。